

教職員・院生版生協だより

かけはし

No. 279

2008年10月号

発行 名大生協理事会

編集 名大生協教職員委員会

☎ 学内線 7540, 学外線 781-1111



教職員委員会下期方針合宿
内海「はしもと」にて
2008.9.6-7



全国セミナーの帰りに
松代大本営
地下壕内にて
2008.9.15

中国人殉難者慰霊祭
瑞浪・地下壕前にて
2008.9.21

名大生協のホームページ (URL) <http://www.nucoop.jp/>
教職員委員会への e-mail あて先 kyoshoku-c@coop.nagoya-u.ac.jp

も く じ

【主張】

生協への加入・増資と利用をお願いします!!----- 3

【企画案内】

名大生協で取り組んでいる平和活動報告会のご案内 ----- 4

PeaceMovie「HOTEL RWANDA」----- 4

中山道を歩こう(その3)----- 5

ワイン造りとそば打ち体験----- 6

生協りんごの産地見学----- 6

【報告】

夏の組合員交流企画報告----- 7

名古屋大学平和憲章エッセイ審査結果 ----- 8

名古屋大学平和憲章エッセイ入選作品「本当の平和」 ----- 9

瑞浪・中国人殉難者慰霊供養祭の報告 -----10

全国教職員セミナー 2008 報告

全国の取り組みに学びながら -----12

教職員委員会下期方針合宿報告 -----28

教職員委員会活動日誌 -----27

【記事】

魔言「街路樹」「達人の言葉」「難聴」-----16

東山キャンパスおよびその周辺のゾウムシ⑧

「路傍の雑草にひそむゾウムシその3」-----18

ランニングノート (1)

「名古屋市民スポーツ祭」-----21

ニュースに一喝!

「ガソリンの高騰」「二重価格—非食用米の転売」

「国民がやかましい」 -----22

ある団塊世代の読書ノート④「戦争について学ぶ本」-----24

かけはしの輪 -----26

アンケート・クイズ解答用紙 -----30

CO-OP QUIZ < Logic > -----31

秋の教職員委員会企画満載 ----- 裏表紙

主張

教職員の皆様、二〇〇八年度に生協に加入された教職員・大学院生の皆様、加入そしてご利用いただき、誠にありがとうございます。

名大生協教職員委員会では「秋の生協強化月間(10月～11月)」に取り組んでいます。

10月～11月末まで加入及び基準出資額である2万円まで増資されました教職員の皆様に利用額無制限の15%オフの書籍割引利用券の特典を差し上げます。

この機会に是非とも加入または増資をよろしく願いたいと思います。ただし、ご利用の期限は12月末までの営業日までとさせていただきます。

名大生協の加入率は学生100%弱、院生約75%に対して、教職員の加入は約50%強ほどに留まっています。基準出資金についても学生・院生2万円に対して、教職員はこの基準額に達していない方も結構おられるのが現状です。教職員委員会では、この期間中に基準額(2万円)に加入または増資された組合員の方は委員会の諸企画(下記を参照)に全て半額で参加できます。この機会に加入・増資にご協力をお願いいたします。

ただ、そして利用をお願いいたします。

加入または増資をされる方は、北部厚生会館2階「組合員コーナー・内線7540」「医学部書籍部・内線5208」「大幸購買部・5552」までお気軽にお申し付けください。

名大生協では、昨年に北部厚生会館1階を全面的に改装して大学のコンビニエンスストアとしての機能を備えたお店にリニューアルしてきました。「パン

生協強化月間開催中

(書籍15%割引利用券の特典付)

生協への加入・増資と利用をお願いします!!

だが屋」や耐震改修された全学教育棟の「プランゾ」も改装して利便性を上げてきています。今後も勉学・研究に必要な文具・事務用品、事務機器はもちろん、コンビニ商品などのコーナーも充実させていきます。南部、北部旅行・サービスタワーはいろいろな旅行・出張など適切な提案をできますので一度ご相談ください。

食料や燃料費の高騰で皆さんには大変ご迷惑をおかけしますが、各地区の食堂部も努力

を重ねていますので、引き続きご利用をお願いいたします。また、全国の大学生協でも珍しい印刷・情報サービスタワー(内線7552)では印刷物はもちろんのこと学会運営まで受け付けていますのでご利用・ご相談ください。40年経過し老朽化した南部食堂は来年夏以降に改築される予定です。

教職員委員会では、この秋以降の企画を考えています。紅葉

の中をのんびり散策する中山道ハイキング(11月3日、今回は落合宿・馬籠まで)、ワイン作りとそば打ち道場体験ツアー(10月25日～26日)、生協リングの産地見学(11月22日)、献血、ビデオ上映会や赤ちやうちんなどの組合員交流企画、学内で美味しい食事をとりながら生の演奏を楽しめる「音としやべりの金曜サロン」などの企画・準備をしています。本誌やチラシなど案内が届きましたら気軽に参加いただけますと思います。蛇足ですが

が、本誌「かけはし」が国立国会図書館よりこれまでの発行されたものから最新号までの寄贈依頼を受けています。

1972年創刊後、一時中断しましたが、15年後の1987年に100号、25年後の1997年に200号、その後、委員の減少や多忙化により2001年から隔月発行になり、36年後の本年夏で287号まで発行してきました。現在では、版下化まですべての作業を委員会で行っており、印刷に回し、生協通信の袋に入れて生協職員の手で配布をお願いしています。編集・発行に携わって25年間継続してきたことを誇りに思い、今後も皆様に愛読される機関誌として頑張っていきたいと思います。ぜひご意見・ご投稿をお寄せいただきたいと思います。

【お詫び】

かけはし278号にて、マルセバンの工場見学の記事を載せ、鈴木社長のパンへのこだわりや熱い思いを理解していただき利用に結びつけられたと思っていたのですが、燃料費の高騰から配送で採算が取れないので取引を終了すると通知を受けました。期待された組合員の方には誠に申し訳ないのですが、利用できなくなってしまうと。ここに

夏の平和の集大成 「名大生協で取り組んでいる平和活動報告会」のご案内

この夏、生協では各組織委員会にてさまざまな平和の取り組みを行ってきました。この度、すべての取り組みの報告と各階層を交えてともに「平和」という共通のテーマで取り組んで来たことを紹介・報告しながら階層を超えたところでお互いに確認できればと思い平和活動報告会を開催することとしました。組合員の皆様には平和憲章のある大学としていかに平和について学んで来たか、学ぶべきかを企画者、参加者を交えて話し合えればと思います。ぜひご参加をお待ちしています。

生協が取り組んでいる平和活動に関する報告

ピースナウヒロシマ、ピースナウオキナワ、平和憲章エッセイとオキナワの旅
名大祭で取り組んだミニ平和資料館 豊川海軍工廠に関わっての取り組み
瑞浪の中国人殉難者慰霊供養祭への参加

学内の平和活動の取り組みについて

職員組合、全学会などでのヒロシマ代表団の方にも報告のお願いをしています。

開催日時：2008年10月21日(火) 18時～20時

開催場所：フレンドリー南部

内容：○各企画参加者からの報告

- 職員組合と全学会など他団体の取り組み紹介
- グループに分かれてのグループ討論
- グループからの発言とまとめ

PeaceMovie 「HOTEL RWANDA」

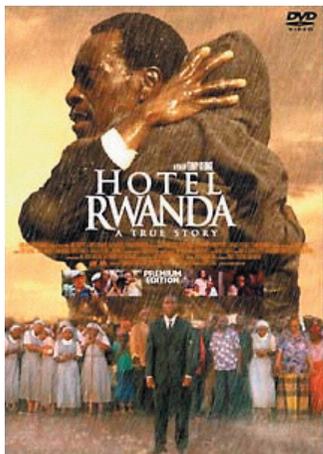
名古屋大学平和憲章委員会では平和に関する映画の上映会を隔月で開催することになりました。今月は映画「ホテル Rwanda」です。この映画はフツ族とツチ族の間で続いていた内戦が終息、和平協定が結ばれようとしていた1994年、ルワンダの首都キガリ。外資系高級ホテル、ミル・コリンの支配人ポールは、近くフツ族の民兵によるツチ族の虐殺が始まるという噂を耳にする。やがてフツ族大統領暗殺の報道がなされ、フツ族が武器を片手にツチ族を襲撃し始めた。フツ族のポールは、ツチ族の妻・タティアナと息子たち、そして隣人たちを守るため、ホテルに匿うのだが……。

日時：10月23日(木)
18時～

会場：工学部2号館
北棟3階332号室
職員組合会議室

軽食代：300円

主催：平和憲章委員会
次回の作品は「蟹工船」
12月18日の予定です。



2005年度アカデミー賞で、主演男優賞など3部門にノミネートされた話題作。「アフリカのオスカー・シンドラ」とも言われるべき人物を、ドン・チードルが忘れられない名演技で見せてくれる。94年に中央アフリカのルワンダでの民族間抗争が大虐殺に発展し、3ヵ月あまりの間に100万人もの人々が殺された事実にもとづいた話だが、こうした内戦、虐殺の現実にはルワンダだけではない、多くのアフリカの貧しい国に起こっている、または起こりえるということに、観た人は改めて気付くことだろう。そして“無関心”が大きな罪であることを。

中山道を歩こう(その3) 落合宿～馬籠宿へ

中山道は、徳川家康が制定した5街道の一つ、東海道とならんで京都と江戸を結ぶ重要な街道でした。中山道は別名「姫街道」とも呼ばれたように女性の旅人が多かったといわれています。江戸の末期、皇女和宮が京から江戸へ向かった輿入れの行列もその一つです。

今回は落合宿(中津川市)から馬籠宿(中津川市)まで(約6.8km 歩行時間約2時間)落合宿を過ぎると「是より北木曾路」の石碑があり、これまでの美濃路から木曾路に入る、馬籠宿は木曾路最南端の宿場町で文豪島崎藤村の生地としても知られている。芭蕉の句碑もあり、歴史と文化の香り漂う宿場町をゆっくり見学します。

石畳、高礼場、本陣跡、馬頭観音、道祖神、常夜灯、芭蕉の句碑、道標などところどころに江戸時代の面影を見つけられる中山道を歩いてみましょう。

歩き疲れた後は、温泉にゆっくり浸かって疲れを十分とってから名古屋に帰ります。



日程：2008年**11**月**3**日(祝・月曜日)

行き先：**落合宿から馬籠宿まで歩きます**

参加費用：大人**1,500**円、小人**750**円

島崎藤村記念館入口

(往復交通費、保険料、温泉入浴料)

集合場所：名大博物館前**8時30分**集合

募集人員：**14**名

服装・持ち物：ハイキングに適した靴、服装、
雨具、弁当、水筒、リュック、帽子、手袋等

問い合わせ先：kyoshoku-c@coop.nagoya-u.ac.jp

参加申込：<http://kyoshoku.coop.nagoya-u.ac.jp/application.html>



ワイン造りとそば打ち体験

日程：2008年**10**月**25・26**日（1泊2日）

行き先：**笛吹ワインと昇仙峡そば道場**（山梨県）

参加費用：大人 **12,000** 円、小人 **10,000** 円

（往復交通費、保険料、1泊3食、ワイン造り・そば打ち体験込み）

集合場所：名古屋大学博物館前 **9** 時集合

募集人員：**12** 名

ワイン造り体験とそば打ち体験をセットにした企画を組んでみました。初日は山梨県笛吹市にある笛吹ワインにてブドウ狩りをして、足踏みでジュースにします。ラベルを作って後はワインが送られるのを待つだけ。2日目は朝からそば打ち体験です。昼は打ち立て、茹で立ての美味しいそばを食します。そんな楽しい体験ツアーに参加してみませんか。

そば道場→

タライのブドウを踏んでつぶします。↓



生協りんごの産地見学

日程：2008年**11**月**22**日（土曜日）

行き先：**Fエースりんご園**（長野県松川町）

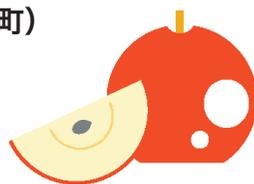
参加費用：大人 **1,000** 円、小人 **500** 円

（往復交通費、保険料、温泉入浴料込み）

集合場所：名古屋大学博物館前 **9** 時集合

募集人員：**10** 名

めいきん生協産消提携Fエース農園のりんごの産地を見学します。「産消提携」とは、めいきん生協が、「健康な食生活」「食の安全と安心」「食糧自給率の向上」などをめざし、進めている取り組みです。産消提携の「産」は生産者、「消」は消費者のこと。「健康に配慮し、新鮮で、安全で、おいしい産物を」と願う消費者（組合員）と、その願いに応え、生協が定めた農産物の品質基準「栽培自慢」を取得した生産者がお互い交流し、品質向上、安定供給を目指しています。省農業で安心安全なりんごの生産の苦労話など生産者と交流もいたします。帰りに立ち寄る松川町内の温泉「清流苑」の露天風呂も楽しみです。家族そろっての参加も歓迎いたします。



夏の組合員交流企画報告

6月23日からの生協サマーフェア企画に呼応して、教職員委員会では夏の組合員交流企画を開催いたしました。

献血の協力者は40人

6月24日の献血には、受付した方が55人みえました。海外旅行や薬の服用などでお断りした方が15人と多かったですように思います。200mlの方が3人、400mlの方が37人、計40人の方に協力頂きました。

うたごえ喫茶に17人参加

6月24日18時からIBカフェを借り切ってスタートの予定でしたが、主催者側の不手際もあり18時30分にスタートとなりました。職員合唱団の歌唱指導（広島の高校生の詩をもとにした「ねがい」など）を受けながら数曲練習曲を参加者みんなで歌いました。その後、職員合唱団の演奏（ふるさとの四季より、初夏バージョン、黒人霊歌、オリジナル曲など）があり、その時間を利用して参加者の方には食事を提供しました。

職員合唱団の美しい歌声に魅了された後、またみんなで楽しく和気あいあいと言った感じで、

あつという間の1時間30分の歌声喫茶はIBカフェの営業時間の20時に合わせて終了しました。

DVD上映会「ハリイポッターと不死鳥の騎士団」

ゆくどんで予定していた6月25日がコンパが入っていたので急遽ホスター等で会場変更を加えて宣伝しましたが、委員会の3名の参加しかえられませんでした。カフェフロント（6/27）は書籍15%デーと重なり店は大入りで、生協職員はレジに張りついた状況にも関わらず、照明を落とすのに手を貸していただいたり助かりました。こちらの参加者は7〜8名ではありましたが、それぞれ楽しんでいただきました。

作品の関係でガラスが割れるようなシーンがあり、大音量での上映だったので、書籍のお客様さんや職員さんに恐怖を与えてしまったことをここにお詫びいたします。次回からはセールの日程を見た上で重ならない日程で開催したいと思えます。

ピアガーデンには30人

お店の設営の要員不足により

スタートが遅れたことと、定員一人での対応で初めて10人の方がいられてんやわんやのスタートとなりました。学生委員も参加され、楽しいひとときを味わっていただけたのではないかと思います。

準備していた食材もすべて売り切れ、閉店の20時20分まで多くの方に利用いただきました。売上は2万7500円あり、利益6,238円をユニセフを通してミャンマーサイクロン、中国大地震の被災者救援募金に利用させていただきました。



カフェフロントでの「・・不死鳥の騎士団」の上映風景

名古屋大学平和憲章エッセイ

審査結果

名大生協では、新入生を迎える時期に多くの新入生に名古屋大学平和憲章を読んでもらうことを、平和についての少しでも自分の頭で考えてもらおうと、平和憲章エッセイ募集の取り組みを行っています。今年も昨年同様、4月1日から6月末日までの期間で、入選者には東海地域センター主催の「オキナワの旅」参加費全額援助を副賞とし、佳作には5千円分の図書カードと豪華賞品がもらえる企画として開催しました。

今年度の応募作品は5作品で、昨年度よりも3作品減りました。応募者は大学院生1名、学部2年生4名の計5作品でした。

審査委員長の講評

まず、忙しい学生生活の中で、時間をやりくりして平和憲章エッセイに応募してくださったすべての方にお礼申し上げます。教員をしていますと、授業で課されたわけでもないのに、ものを考え、文章を書くこととすると、自分で、いかに貴重なことであ

るか、身にしてみています。また、平和について考える、ということとはとてもやっかいなことですが、それは、我々が「平和である」という状態をリアルに実感しにくいということが原因でしょう。「平和でない」状態はリアルです。それは、痛い、悲しい、ツライ、腹立たしい、ひもじい……とりあえず、平和は、これらの具体的な苦痛の不在です。不在を実感することは非常に難しいことです。ですから、平和について論じようとする、ついつい、机上の空論や概念遊技に陥ってしまいます。今回、応募してくださった方々はそれぞれの方法で、平和について何とか具体的に、実感を伴って論じようと工夫されています。自衛隊という具体的な存在について考えることによって、あるいは、マシヨンでもめ事という身近な例と結びつけることによって、こうした努力に、審査員一同、敬意をはらいたいと思います。あらためて、応募ありがとうございます。

審査結果

入選（1名）副賞「オキナワの旅」旅費全額援助

鈴木まり子（教育学部）

「本当の平和」

佳作（2名）副賞図書券

5000円分

谷 直樹（法科大学院）

「学問と平和」

岡田麻美（法学部）

「自衛隊の可能性」

2008年8月4日

審査委員長 戸田山和久

入選作品の審査員コメント

○氏の小さな日常からでも「教育」という専門性を通して、平和への「変革」を志向したいという真剣な思いが、具体的な経験に即して描かれており、非常に心を動かされた。ただ、解決できない問題に対するいわゆる我々先進国側の責任が「支援」の名の下に棚上げされてしまっている印象を受けた。また、戦争を「憎しみと暴力の連鎖」という感情対立の問題にのみ矮小化して捉えると同時にその感情対立が若い世代なら解決可能という楽観的観測に対し、若い世

代以外の「和解」が教育発達の側面からどのように達成されるべきかをさらに考えて頂きたい。

（鬼頭）

○平和憲章を読んだ上で、自分たちの平和に対する姿勢について一番しっかりと考えた考えを持っていると感じました。「何が必要か」「自分に何ができるか」「何がしたいか」。それが率直に伝わってきており、最も胸に響く内容でした。

（松澤）

○平和憲章を読んだ上で、自分の専門、将来像を描けていると思いました。簡潔でありながら、平和憲章を踏まえた自分の決意に素直に共感できました。（野田）

○平和憲章制定から21年経過した現在、当時よりも権力による学問の自由への介入の度合いは確実に大きくなっている。宇宙基本法など、大学の教育研究が公権力によって強制させられるシステムができたことをだれも指摘できなかったことは残念だ。

応募者が法学部&教育学部ということを考えて致し方ないが、理工系の学生は技術革新の最前線にあり、日々の研究が戦争に利用される危険性をはらんでいるという緊張感が必要だと思ふ。この点で、理工系からの多数の応募を望みたい。（河合）

本当の平和

教育学部 鈴木まり子

名古屋大学平和憲章には、戦争への深い反省と平和への強い決意が込められていた。大学として、平和の創造のために実行することを宣言している。平和の実現のために、

自分の学んだことを生かしていく姿勢をおしえてくれる。この名古屋大学平和憲章が求めているのは、たんに戦争がない状態ではない、真の平和だ。

私たちが生きる世界には、解決できていない問題がたくさんある。終わることのない暴力の連鎖、抜け出すことのできない貧困、広がる格差、地球規模の環境問題。さまざまな要因が複雑に絡み合い、

解決の糸口さえ見えないこともある。だからといって、目をそらしてしまえば、何も変わらない。

私は、あきらめない。どんなに困難な状況にあっても、未来を描くことを止めたくないから。人々が共に生きられる道があると信じていたいから。問題の大きさに絶望するのではなく、少しずつでも変えていきたい。自分の学んだことを生かせる道を見つけた。

私は教育のことをもつと学びたいと思う。教育を学ぼうと思っただきつけは、高校1年生のときの経験だ。NPO「国境なき子どもたち」の募集していた、

レポーターになることができた。ベトナムのストリートチルドレンや彼らを支援する現地のNPOを取材するプログラムだった。大都市の路上で生きる子どもたちに出会い、話をきき、一緒に街を歩いた。子どもたちの困難な状況やその背景にある社会の問題を全身で感じた。友達になった、その子どもたちを目の前にして、何かをしたいと強く思った。一方的に何かをしてあげる支援ではなく、その人たち自身が自分を守り、未来を切り開いていく力をつける手助けが必要だと思った。それが広い意味での教育の役割だと思う。

教育を学びたいと思ったもうひとつの理由は、これからの世界を共に生きていく若者の力を信じたいからだ。世界では、憎しみと暴力の連鎖が続いている。この悲しい連鎖を断ち切ることができるとすれば、若い世代だ

と思う。戦争の悲惨さを知り、二度と繰り返さないように学ぶことができる。まずは、おたがいを知ることからはじまる。おたがいを知ることができ、違いを認め合うことができ、戦争が続いている国や日本のように今は戦争をしていない国、それぞれの場所に生きる子どもたちが平和について考え、共に生きていくための道をつくるための教育が必要だと思う。

名古屋大学平和憲章を読んでも、今自分にできることを問われているような気がした。今の自分にできることは、学ぶことかもしれない。今、自分のまわりの世界でおきていることから目をそらさずに、考え続けていきたい。戦争がなく、子どもたちが幸せに暮らせる本当の平和。私は、あきらめたくない。

瑞浪・中国人殉難者慰霊供養祭の報告

2008年9月21日 河合利秀

瑞浪の中国人殉難者慰霊供養祭のことを、みなさんはご存知でしょうか？ これは、日中戦争の端となった柳条湖事件（1931年9月18日）に近い日曜日に、毎年執り行なわれるもので、今回で42回目となります。私たちは、今年も、この慰霊供養祭に留学生を含む学生を伴って参加しました。今回は地元の青年との交流もできて、とても意義深いものとなりました。

今年は大祭の有志企画で一緒に来た留学生2名と学生2名、教職員2名で参加、前日の快晴とは打って変わって、途中豪雨に遭遇しましたが、現地に付く頃には雨も上がりました。現地で地元の青年ら4名も加わり、化石博物館の隣に常設されているトンネル跡に入って、化石の白い貝殻とともに、ダイナマイトを仕掛けるためにあけた穴（鉄棒で突く）やツルハシで壁面を欠いた跡、腐ってなくなりそうなカンテラを掛ける鉄金具などを見たあと、公園の喫茶店に入って昼食をとりながら、自己紹介、その後、生協教職員委員会のメンバーであり、地元土岐の平和運動に携わっておられる柴田さんから、慰霊供養祭が

実施されるようになった経緯や、瑞浪地下工場トンネルの規模、当時の様子について聞きました。昼食後、市が主催するトンネル見学会会場に行くと、丁度中国領事館など来賓の方々と一緒に、地元に残存運動の中心となっておられる加藤さんの案内でトンネルの中を見学、当時の様子など貴重な話を聞くことができました。

2時から始まった慰霊供養祭では、お昼の豪雨の影響か、例年より少ない参加者でしたが、敵か且つ力強い弔いのことばが続き、明白寺住職の読経のなか、黙祷をささげ、参加者全員で焼香をした後、平和の鐘を鳴らして散会となりました。

私たちは日中不戦の誓いの碑の前で記念写真を撮り、隣接している公園の東屋で感想交流を行いました。交流会の最後に、地元の大野さん（養護学校の教員）が心にしみる歌声を披露してくれました。これまでの慰霊祭とは一味違った感動もありました。この交流では留学生

（中国人）の「戦争については勉強したが平和のことを考えたことがなかった」「直接見て学ぶことができなかった」「経済やスポーツの交流よりこちらの草の根の交流が大切」「日本に来ないと知ることができない・来てよかった」という感想に対して、日本の若者たちからは「歴史の中で知らないことが多い・互いに知ることが大切」「地元で暮らしているが知らなかった・日本人がおこなったことを恥ずかしく思う」「争いごとを力で収めようとすれば恨みの連鎖になるだけ」「互いに相手を敬う気持ちが大切」と呼応し、この慰霊祭が、私たちに「互いに知り合うこと、信頼しあうこと」によって未来は切り開ける」という確信を与えてくれる、すばらしい取り組みであることを、改めて実感した次第です。



中国人殉難者慰霊供養祭

汪宇

「殉難者」ということばははじめて聞きました。あの悲惨な日中戦争を思い起こすような話をあまりされていない日本では、「中国人殉難者」を供養する活動も行われているということは、思いませんでした。そして、どんな人がどんなことをやっているのかに興味を持ち、今回の供養祭に参加させていただきました。

瑞浪に着いたら、先ず地下工場を見学に行きました。供養会の近くに強制労働者たちが掘っていた地下道があり、見に行ったら山の真ん中にある洞窟です。ヘルメットをかぶって、山を登り、洞窟に近づくと寒気が一気に流れてきました。中に入ったら、何もない暗い洞窟です。出た時ヘルメットをかぶった子どもが二人上ってきて、後ろに両親がついてきました。近所の人のようです。この一家も洞窟に入りました。ここは関係者だけでなく、近所の人も来ている場所だなど親近感がわいてきました。

午後二時に供養祭があるので、会場に移動しました。そこに大きな石碑が立っており、「日中

不再戦の誓い」という文字が大きく刻んであります。この立派な碑は瑞浪市民の力で立てたよと地元の加藤さんが誇り高く語りました。その加藤さんはかつて地下工場の建設を目撃し、今そこそこかかつての状況を熱心に語っています。ところどころ悲惨な話が出て聞くだけでも気持ちが悪くなるのに、語る側がどうやって自分の気持ちを乗り越えたかを不思議に思いました。おそらくいろんな経験が積み重なってきて、いろんなことを見抜いたからかもしれません。

供養祭が終わった後、核燃料再処理の研究所に行きました。今回の供養祭を案内してくれた柴田さんが核燃料再処理のことも紹介してくれました。すると、話題が20世紀の戦争の話から今世紀のエネルギー問題に変わりました。しかし、どちらの場合も、日本が巨大な列車に乗って、行方が分らないまま走っているような感じですね。もちろんエネルギー不足は中国を含む全世界が抱えている問題でもあります。今回の旅は決して重い話だけではないです。富士山と八ヶ岳の由来、水の神、火の神、三国志など、車の中で河合さんや同行の学生さんと四方山話をして時のたつのも忘れませんでした。

中日友好のあかし

留学生委員会 孫利偉

今日は瑞浪市で開催された中国人殉難者慰霊供養祭に参加しました。第42回とういことに感動しました。このような静かなところに中国人の殉難者のために、42年間続けてわざわざ式典を開くことが素晴らしいと思います。これはまさか中日友好のあかしだと考えています。

中国と日本は一衣帯水の隣国です。古くから友好交流の歴史が続いていました。しかし、中日戦争で中国と日本の関係が悪くなったことは非常に残念なことでした。しかも、戦争中、中国人だけではなく、朝鮮人も日本に強制的に連れてきて、重労働をさせました。当時、「劳工狩り作戦」という言い方も存在しました。この言い方から、当時の労働状況がどのように残酷なのかは少し分かるように残りました。この人達に提供された宿舎は風呂なしの非常に悲惨なバラックなどです。食事としては小麦粉とこめかで作ったパンしかありませんでした。しかも、一日3個しかもらえませんでした。このような厳しい生活状況で重労働が任せられたのはいか

に大変でしょう。それから、工事現場の温度はとても低くて、私たちは15分ぐらいでも耐えられない状態でした。その時の労働者たちはもつと大変だと思えます。そして、栄養がうまく取れないので、39年の中国人は日本で命を失いました。資料によると最年長者は61歳で、最年少者は17歳です。人間は人間として生きられないことは非常に残念に思います。

しかし、中国人の強制労働者の悲惨な生活状況を見た近所の日本人の人達はすごく同情して、サツマイモなどの食べ物や強制的に生かされた中国人が労働を終えて中国に帰るときに、ちゃんと村の家々にまわって、お礼を言いました。人はお互いに支え合うことがあったからこそ生きられるようになります。これはまさかその証明です。人間は人間として生きられることは平和だと思えます。そして、中国と日本の近代の友好交流のみならず、ここにあることが、私は強く感じました。中日友好のあかしとして、この慰霊供養祭を永遠に続けてほしいです。

私は日本に来る前に、平和について自主的に考えることはほとんどありません。しか

し、今年8月に、Peace Now Hiroshima2008とうとうセミナーに参加したおかげで、平和についていろいろ考えるようになりました。特に、被爆者の話がとても印象的でした。戦争を無くすこと、核兵器を無くすことは正直にいうと私たちにはできません。私たち若者が今できることは思いやりのこころを持つて、人々と暖かく接することです。お互いに思いやりを感じさせることも世界の平和に繋がっていると、私は強く信じています。今日の慰霊供養祭を通じて、何十年間に中国と日本の間に、このような思いやりも存在していたことが分かりました。中国と日本は永遠に不再戦だけではなく、世代代にこのような友好を続けてほしいです。このような暖かい思いやりをできるだけ多くの人々に知らせ、これから中日友好交流をもっと広げたいと思えます。自分は微力ながらも、一生懸命に頑張りたいと考えています。そして今日はいろいろな人に出会って、いろいろな話を交流して、とてもいい勉強になりました。ありがとうございます。

全国の取り組みに学びながら

教職員委員長 皆川 清



全国教職員セミナー2008でのパネルディスカッション風景

9月12日から13日にかけて新潟大学と朱鷺メッセにおいて全国教職員セミナー2008が開催されました。このセミナーは全国の大学生協の教職員や生協職員が一堂に会して大学と大学生協について問題点などを話し合い、交流するものです。オリンピックの年に開催され、前回の大阪教育大学から4年が経過しています。今回のテーマは『大学淘汰時代』の大学と大学生協、サブテーマとして『大学・学生

のリアルな姿と大学生協を通じて教員・職員ができること』と題して行われました。参加者は北海道から鹿児島までの大学から320名余の教職員・生協職員・学生の皆さんが集いました。

名古屋大学生協からはセミナー実行委員、分科会司会者の2名が前日の実行委員会から参加、当日は飛行機での参加2名、新幹線での参加2名の教職員委員と専務理事の7名が参加しました。

12日の13時から全体会があり、新潟大学の栗生田忠雄実行委員長の開会挨拶、富田宏治全国大学生協連教職員委員長（関西学院大学教授）挨拶、来賓として下條文武新潟大学学長の挨拶がありました。その後、庄司興吉全国大学生協連合会長理事による「グローバル化と大学生協の課題」と題して講演が行われました。凄まじいまでの地球的規模の市場化が進み、自然環境や人間生活を取り戻すために生産者がわかるものを仕入れ利用する、電子情報化の積極的逆用などで日

本の大学生協のユニークさを柔軟な発想で原則を忘れずに発揮していつてほしいと話されました。特別報告として高橋能彦新潟大学農学部フィールド科学教育研究センター教授から農学部で採れたお米を利用してお酒を製造する『新雪物語』の取り組みについて報告がありました。

休憩のあと、メインテーマによるパネルディスカッションが行われました。パネリストとして名古屋大学副総長の杉山寛行先生には大学全入時代と都市、地方による偏在、格差の進行、財政面でのカットによる教育、研究の劣化などについて話され、愛媛大学の佐藤浩章先生からは他国に比べてキャリア教育がほとんどなされないまま社会に出される。もっと大学生の内にキャリア教育を行う必要性があるのではないかというものでした。

宮崎大学の江藤敏治先生からは学生の活動とその成果を報告することで学生の学びを評価されたこと、山梨県立大学の藤谷秀先生には生協を作ることで消費生活の改善のみではなく大学作りへの学生の参画や大学の活性化に貢献していることが話されました。コーディネータとして日本女子大学の福本俊先

生、まとめ役として岩手大学副総長の玉真之介先生から生協運動を通じて教員・職員がもつと学生の教育に頑張つていかななくてはならないとまとめられました。夕方からは新潟大学生協食堂でのおもてなしで楽しい懇親会が行われました。

翌朝9時半から(1)大学生協の教育支援、(2)大学生協の取り組む環境問題、(3)大学生協の進める「食育」、(4)学生と共に平和を考え国際交流を深める活動、(5)教職員の組織と参加の5つの分科会に分かれて活発に問題提起と意見交換・交流が行われました。

午後からはオプションとして全国書籍事業推進委員会主催による「書籍オプシオン企画」に全員で参加しました。出版業界の不況についてみせず書房の田崎洋幸さんから市場の縮小、ネット書店の台頭、中小書店の廃業続出など激しい変化が進行している厳しい状況が報告されました。予算カットから全国の公共の図書館の購入がかわめて少なくなっていることも話されました。インターネットの進行が一因なのか学生の読書離れが依然と進んでいて大学生協でも長期利用減少が続いています。その

中で教員が学生に与える影響は多いと思われれます。きちつと教科書のなどの教材を先生方に提案する、新潟大学の教員・学生による書評誌「ほんのこべや」、全国的行っている読書マラソン大賞など様々な活動を通じて自分の血や肉になる知識は本を通じて吸収していくことの重要性をねばり強く教えていくことが重要と思われれます。夕方までセミナー関係の行事は全て終了しました。

翌14日は教職員委員全員で佐渡観光に行きました。佐渡金山や佐渡歴史伝説館、牡丹で有名な長谷寺、朱鷺が保護されている朱鷺の森公園などを見学してきました。佐渡伝説記念館の売店ではかの有名はジェンキンスさんが元気に働いておられました。

15日は朝から高速道路に入り、途中長野インターで降り松代大本営が予定されていた象山地下壕を見学してきました。軍部が本土決戦の最後の拠点として昭和19年11月11日11時着工し、終戦の翌20年8月15日までの9ヶ月の間に当時の金で2億円の巨費を投じて延べ30万人の住民及び朝鮮人の人々が労働者として強制的に動員され、1日3交替、

徹夜で多くの犠牲者を出しながら工事が進められました。その延長は10数kmに及ぶそうです。この工事は全て極秘に行われていて、もし完成していたら作業者全員抹殺されていたであろうとのことでした。従軍慰安婦の問題はここでも行われていたとのことでした。また、学生達と一緒にゆつくり見学したいと思いつながらこの地をあとにしました。このあと高速に再び入り延々と走って名古屋に戻ってくることで済みました。

このセミナーで学んだことを生協の活動に生かし、いろいろな問題に皆さんと共に考えていきたいと思えます。

第3分科会報告 大学生協が進める「食育」

(伊藤 耕)

第3分科会「食育における大学生協の役割と可能性」に参加しました。初めの報告は昨日のパネルディスカッションのパネルリストでもあった宮崎大学の江藤敏治先生の「食への意識をいかに育てるか」く宮崎大学お料理教室を通してく題して、宮崎大学で行った生活習慣に関する

アンケート調査を基に報告が行われました。朝食の必要性については、朝方の生活をしている学生は夜型の生活をしている学生に比べて授業に集中でき、朝食を食べた学生は朝食を食べなかつた学生より授業に集中できるというアンケート結果が得られたそうです。そのため、生協理事会では朝食を食べる習慣を身につけてもらうため、ミールカード利用者が朝食を食べると100円返却するようにしたそうです。つぎに、新入生を対象として料理教室を開催したという報告があり、自分で料理することで偏食を克服できる可能性もあり、食に対する意識が増したそうです。

次の報告は、農業と食育と題して、新潟大学の粟生田忠雄先生による生産現場からの教育について報告されました。新潟大学農学部ではフィールド科学教育研究センターのサテライト実習として1年生を農業の生産現場に連れ出しているそうで、参加学生は何かを感じ取っているようで、大学生協としても学生の食育という観点で、食の生産現場に目をむける必要があるのではなんでしょうか。名大の農学部にも畑があるので今回の報告

のアイデアを生かせないだろうかと思いました。

3人目は、「ミールプランによる食育(支援)事業の実践」と題して大学生協中国・四国事業連合職員の朝日喜久雄さんによるミールプランの取り組みでした。生協が行う事業を、学生の食習慣を転換し、健康を保障する「食育事業」ととらえ、①ミールカード、②食育サポート、③ヘルスフード、④食文化の継承を4本柱とするミールプランの展開によつて家庭の食卓を代行し、学生の食週間を転換して健康を保障することと定義した結果、食堂の利用も5年間で1.5倍に増えたという報告がありました。

第4分科会報告 学生と共に平和を考え

国祭交流を深める活動

(柴田敏之)

最初に次の四つの報告を聞きました(内は報告者)。一、名古屋大学生協教職員委員会の平和の取り組み(箕浦昌之)名古屋大学)、二、学生が取り組む平和・国際活動(森田春菜)大学生協連学生理事)、三、個性化科目「平和を考える」と副専攻「平和学」

(山崎健「新潟大学教員」、四、京滋奈良地域センター平和推進委員会の活動(大学生協京都滋賀奈良地域センター学生理事)。

名古屋大学・箕浦氏の報告は、「平和憲章」のある大学として学内の諸団体が構成する平和憲章委員会として、また生協独自にも活動をすすめているとして、平和憲章エッセイ募集の取り組み、名大祭におけるミニ平和資料館設置の取り組みなどの紹介と、とりわけ名大の豊川キャンパスにある元豊川海軍工廠跡の見学と保存の活動と、毎年9月に岐阜県瑞浪市でおこなわれる「中国人殉難者慰霊供養祭」に、学生や留学生にも呼びかけて参加していることを詳しく紹介しました。

森田さん(大学生協連学生委員)の報告は、大学生協連のPeace Now! ヒロシマ・ナガサキ・オキナワの企画と、日韓大学生協学生交流セミナーの紹介がありました。

山崎先生(新潟大教員)の報告は、新潟大では1994年から全学共通教育の総合科目目郡として「平和を考えるA、B」「平和を考えるIN新潟」の3コマを開講し、定員15名のところに40名の応募があること、2006年

からは副専攻制度がはじまり「平和学」を開講しているというところで。これらは数人の教員が交代で担当し、受講生には単位も出るということでした。運動生理学が専門である山崎先生も担当教員の一人ですが、「私の場合、『スポーツと平和』というテーマで授業をやっています」と、少しかだけ内容の紹介がありました。

京都滋賀奈良地域センター平和推進委員会の報告は、舞鶴に残る戦争遺跡の見学など、主にフィールドワークの活動紹介でした。

四つの報告の後、討論をおこないました。討論で私の印象に残った発言をあげてみます。

よく「平和とは何か」が議論になるが、平和は、人間の全面発達を保障することを指し、平和でない状態というのは、人間の全面発達を阻害する状態のことだと思ふ。

大学生協の平和活動では学生・院生・教職員が共に学ぶことができる優位さがある。

最後に、私の感想を。新潟大学で続いている「平和学」の講義はすばらしい。名大でもかつては存在していたが、「教養部改革」とともに消滅して

しまった。復活しませんか。

第5分科会報告 教職員の組織と参加

(皆川清)

「教職員の中に多くの生協ファンをひろげるために」と題した、この分科会は2003年から始まった京都大学生協と名古屋大学生協の教職員委員会の交流会が年々その輪が広まり北海道大学、東京大学、大阪大学、広島大学の参加を得て、これまでに京都大学、名古屋大学、東京大学、広島大学と生協の施設見学を含めて経験・交流を年1回ずつ開催してきました。今回、全国教職員セミナーを開催するにあたって全国教職員委員会より教職員の組織と参加について一分科会として開催要請があり、他の大学生協にも示唆を得ることがあるのではないかということで、分科会として開催することになりました。

参加者は70名を超え、一番多くの参加者を得ることができ、期待の高さを感じられました。まず初めにこの分科会開催の経緯をお話しし、各大学生協から報告をしていただきました。昼

食会(昼食を食べながらいろいろな問題について話し合う)については愛媛大学の松野尾裕先生からは今後厳しい状況に対応するために加入や広報活動について話し合ったりしながら教職員向けの加入案内を作成したり、文化レク活動を行っている、島根大学からは中川政樹先生より教職員の多忙化により、理事会への出席が低調になってきたことを受けて昼食懇親会や昼食食べながらの理事会を開催したところ、高い出席率で大変好評であったとの報告がありました。

つづいて、早稲田大学生協の報告で西尾昌樹さん(キャリアセンター課長)、和久井洋一専務理事より、累積赤字2億6千万円から教職員ワーキングによる「生協の役割」として大学コミュニティとして不可欠な存在としての生協としての活動を継続して昨年度(2007)に16年をかけて累積赤字を解消してきたこと、その都度中期計画を実行してきたこと、メインテーマとして「声をかたちに、参加を力に」を掲げて「生協の価値(観)」を伝えることを怠らない、生協事業への協力者Vを作ることを肝に銘じて活動していることが報告されました。



新潟大学の「ほんのこべや」の取り組みを紹介する鈴木先生

新潟大学の鈴木恵先生からは、学生に積極的に読書に楽しみ、その大切さ、楽しさに触れてもらうことを目的に150頁立ての書評誌『ほんのこべや』を春と秋の年2回発行し、通算34号継続してきていることが話されました。投稿者は教員43名、学生2名で特集コーナーや自著を語るコーナー、アンケートなど充実させてきて、アンケートの回答者に進呈していた図書カードを抽選50名から先着100名にしたと

ころ、うなぎ登りに増え123名の方々から回答があったとのことでした（全員に進呈したそう değildir）。2006年からPDF化してホームページにアップして卒業生を中心にした愛読者の要望に添えている。

(URL: <http://www.nuc.jp/honhokobeya/honkobementu2.htm>)

この活動が学生の活字離れ、書籍離れに役買えば言うことではないと報告されました。

京都大学の生駒時秀さんからこれからの生協にとって教職員の理事だけではなく、地道に活動する組織委員の重要性を訴えました。その後、東大、名大、京大、広大から手短に各大学生協や教職員委員会の状況が報告されました。

教職員の高齢化で悩んでいる大学は多く出されましたが、各大学の状況によって学生や院生と一緒に活動したり、教員理事が定期的に集まって話し合いを持ち、年に1回でも2回でも企画を行い、教職員組合員参加者と楽しい時間を作り、それをきちんと報告していくことが重要ではないかということでした。また、各地域の大学生協同士で施設見学や交流会を持つことも

お店の改善点などが見つかったり、意気が上がり活動に広がりが出てくるのではないかとということでも分科会を終りました。

2008に参加した 教職委員セミナー (星野香)

早朝の飛行機しか無いとの事で、5時前に目を覚まし一番列車に乗った。調子が出ないので搭乗前に泡の出てる注射液を購入してごまかす事にした。8時半には新潟駅にバスで着いたが、喫茶店を見つけれなくてコーヒーは飲めず、会議は午後なので観光用の巡回バスに乗るも何処へ行くのか決めていないので、付和雷同を決め込み、多数の方が下りられた水道のタンクの上に作られた展望台へ行き、ピザトーストとコーヒーを頼んで数十分で一回転する椅子でくつろぐも佐渡が見えなく残念であった。新潟大学と名の付くバス停が4個あるのにびっくりしつつ何とか会場に辿り着き、食堂でつけ麺（和そば）を頼んだら大きなどんぶりに中華風汁が出てきて、周りの意見を尊重して汁にとろろをぶち込んだら失敗

であった。

全体会では農学部で作られたコメで純米吟醸を造っていることにびっくりしたけれど、皆さんの実習で成り立っていることを聞いて、名大でも出来ればいいなと思った次第です。お開きの時、残っていた一本を専務がもらってきてくれたので、皆さんと飲もうと思ったけれど、さすが酒どころの新潟で開かれた交流会、東海で集まった2次会で飲みすぎたのか、少し飲んだだけで気がついたら家にまで持ってきていました。二日目は朱鷺メッセで教育支援の分科会へ参加し、九州工業大学での取り組み学年横断型「わくわく工学プロジェクト」が印象的であった。引き籠り、そして退学という現象をくい止めるのに、自ら参加する「何か」が有効であることを再確認することができた。



会場ロビーで紹介した名大生協の取り組み

街
路
樹

暑いさなか、名古屋の町中を自転車で行き回った。と言っても全体から見れば一部に過ぎないけれども。暑い最中だけに、街路樹の日よけの役割がよく分かった。

概して言うならば道幅の広いこともあるけれども、日よけの効果のある街路樹は少ない。以前に書いたことがあり、一部からは反論があったが、今回も百日紅の街路樹はナンセンスだと思った。確かに綺麗ではあるが、それは庭にでもあればの話だ。日よけ効果はゼロ。

一番良かったのはケヤキの並木。名古屋の道路には特別の場合を除いて名前が付いていないので、その道路の名前が言えないけれども、ケヤキ道路とでも付けたいくらいだった。お城の西側に通っている何本かの道路の内の一つ。長さにしたら、2kmもな

くはないが道の両側はかなり大きなケヤキが植わっている。ここを通ったときは、温度が二三度は低く感じられた。外堀通りの景雲橋から東片端までも、ケヤキではないが、涼しい木陰を作っている。高速通りの陰でさえ涼しいが、木陰には叶わない。熱田神宮の東側にもいい並木があった。ここもケヤキだった。

白川公園の西側にも距離は短い、ケヤキ並木が涼しかった。若宮大通りはトウカエデが歩道にとぎれとぎれではあったが、いい陰を作っていた。

他にも、メタセコイヤやトウカエデ、プラタナス、ポプラ、銀杏、楠、シンジュなどはあちらこちらに気持ちのいい木陰を提供している。東山公園の北側を通る東山通りの南側、つまり、公園に沿ったところを走るとき

の気持ちは格別。冬はそこはじんやりするが、木の香が気持ちがいい。

旧東海道を走った。一里塚が

笠寺の南にあるが、その他には古そうな道のたたずまいがあるだけで、これはとうとう並木も見られない。鳴海に抜ける当たりも涼しい。これは、車に不便なため交通量が少ないからだ。崖下などは涼しい。これは、天白の植田当たりにもある。八事の塩竈神社当たりは木陰は多いが、坂がきつい。桜通も、銀杏の木陰はほんの少しになってしまった。久屋通りは余り通る機会はないが、木は沢山ある。

春落葉する楠にしろ、

秋のケヤキにしろ、落葉の時は大変だが、此の枝を夏の真つ盛りから伐採しているのは是非止めて欲しい。

枝を張って涼しい木陰を作る色々な木の中で、一つをあげるるとすれば、やっぱり枝を広く張るケヤキだ。この夏得た結論である。(T)

達人の言葉

「言葉で説明されると、本当は何も理解していないにもかかわらず、分かったつもりになってしまうことがおおいものだ」

「葉を覚えると墮落するのは何処の世界も同じ」

「仕事は盗むもの、とはよく言われるが、盗むにもある程度の力量が必要」

達人と言われるような職人に共通したことであるが、これは、包丁職人飯嶋重房さんの言葉だ。

どれも味わうべき言葉であるが、最初の言葉には「言葉の説明」の限界が遺憾なく示されている。言葉の説明は大切であるが、大事なものはその時期である。分からないもの

魔

に幾ら説明しても分からない。分かったような気になっても、実際には分かっていないことが多いのは事実である。自分の血となり肉となっていないのだ。仕事の極意を極めるにはそれだけの修業が要る。最後の詰め、自分でも何とか分かったり掛けたとき、核心を突いた一言、そのワンポイントを生かすことが出来る力量が、仕事を盗み取る要訣なのだ。「そうか、わかった」。

子供の頃読んだ漫画にはよく宝物探しの話、巻物を見つけたところまで終わるのだが、本当はそれでは何も宝物を得たことには成らない。子供にはそんなことは分からず、巻物さえ手に入れば何でも万能と思われた。西洋のおとぎ話で宝物として宝石類を得る話をよく聞いたが、巻物はそんなに即物的ではない。巻物に何かの極意が書いてあるにしても其れが分からないものには猫に小判。免許皆伝ということが何か巻物を与えられて成されるシーンを見たが、もう、それが与えられ

る力量のある者には書いてあることなどどうでも良くなっているか、最後の一言、それも多分は何も具体性のない訓辞程度のものであろう。それを得ることができるまでの修業の積み重ねこ

難

豪雨とともに激しい雷鳴、稲光、昨夜(8月28日)はこの二三日来の低気圧・前線が高気圧にブロックされた型の大雨の中で、各地に前代未聞と言うほどの豪雨を降らせ、多くの被害を与えた。今日も未だ多くの世帯に避難勧告が出ている。

昨夜の雷鳴はひときわ凄かった。この中、娘夫婦と10ヶ月の孫、今朝になって、あの雷鳴の中、赤ん坊はあれを物ともせずすやすやとよく寝たと言って感心していた。小生も、あの雷鳴は知っていたが、安眠したから、この赤ちゃんと一緒だ。特に難聴で、雷鳴が聞こえなかったわけでは

そが重要だったのだ。

言葉の徒である我々にとつて、言葉は何より大切だが、その言葉を理解するには、それだけの経験が必要なのだった。(T)

聴

我が家は、名古屋駅から300メートルも離れていない。大通りに面してはいないが、一軒隔てて隣のビルの空調器の騒音が喧しい。時折はたつと止むときがあるが、その時にはスツとする。四六時中車の往来は多く、真夜中は少なくなりはしても絶えることはない。実に喧しい。日曜日だけは少し静かであるが、朝方から、いつもいつもどこかで工事の音が喧しく聞こえてくる。とにかく実に騒々しい。よくもこんな所に住んでいられるものだといながら感心することがある。しかし、聴力検査をすれば耳に異常はない。

黒柳徹子さんの『不思議の国のトットちゃん』の中に、「遺言」という章があり、黒柳さんの耳の良さが書かれている。その一方で、黒柳さんが耐えられないほどの音量の音楽会や映画館のことも書かれている。今の若者たちは難聴気味でそのくらいの音量が要るのだという。そういわれれば、小生の乏しい経験でも映画館の大音量の音楽、馴れないからかなと思っていた。テレビのバラエティ番組も耳を聳する大音量の物が多い。小生一人の時はごくごく小音量にするが、家庭内のテレビやラジオの音もおしなべて騒音並みだ。地下鉄も車内放送の大きさから乗りたくなくなる。東京駅の新幹線ホームのやかましきは一体何なのだろう。この頃、名古屋の新幹線ホームも喧しくなってきた。世の中の人達、この騒音に割合寛容だ。そうじゃない人達もいるけれども、一向改まらないのは多くの人達が平気だからだろう。みんな難聴なのかしら。(T)

言

東山キャンパスおよびその周辺のゾウムシ⑧

路傍の雑草にひそむゾウムシその3

理学研究科 井上晶次

皆さんご存知のヨモギ、よもぎ餅は食べたことのある方も多いでしょう。お土産に頂いたことのある新潟県の笹団子も緑色をしていた記憶があるのでネットで検索するとやはりよもぎ餅でした。子どもの頃悪いことをすると「灸をすえる」などというのを聞いた記憶があります。灸の原料のモグサもヨモギで乾燥させて葉の裏側の白い綿毛から作るそうです。昆虫を調べるにあたっては実態顕微鏡で観察しますが、植物はほとんど実態顕微鏡観察したことがありませんでした。そこで、モグサの話を知って実際にヨモギの葉を拡大してみると、確かに裏側には白い綿毛がたくさん付いていました。針の先で引っかくと本当にふわふわした綿のような毛がとれてきます。同じキク科のキクにもあるのではないかと庭のキクの葉を拡大してみました。一見白い糸状の毛がありますが、ヨモギの毛より太くて短く針先



写真1 エゾヒメゾウムシ

で引っかいても綿状には取れてきません。やはりヨモギからしか取れないようです。またヨモギは野外で怪我をしたとき「血止め」にも利用されているようです。しかし、私の子どもの頃知っていた「血止め草」はヨモギではありませんでした。これもネットで「血止め草」を検索すると「チドメグサ」せり科の植物で「葉を傷口に当てると血が止まる」とあり、その写真は私が



写真2 左：エゾヒメゾウムシ、右：クワヒメゾウムシ

記憶していた葉に光沢のある植物と同じでした。この原稿を書くにあたって調べてみて初めてチドメグサなる植物があることを知りました。さて、東山キャンパスではヨモギから3種のゾウムシを採集しています。

1. **エゾヒメゾウムシ**
前回紹介したカナムグラヒメゾウムシと同じグループ(ヒメゾウムシ亜科)に属するゾウムシで、体長3.5mm程度、真つ黒



写真3 ハスジカツオゾウムシ

で模様はありません。エゾヒメゾウムシの名前から北海道を想像しますが、北海道はもちろん、本州、四国、九州と日本全国に広く分布しています。

東山キャンパスには同じような大きさで、真つ黒で模様もなく、よく似たクワヒメゾウムシがいます。これは名前のとおりクワに付くので、東山キャンパス内であれば、採集した植物を記録しておくともう間違いはありません。しかし、これらのゾウムシは飛翔するので、採集した植物がクワだからクワヒメゾウムシ、ヨモギだからエゾヒメ

ゾウムシとはいえない場合があります。やはりきつちりと調べる必要があります。東山キャンパスの場合も、農学部の圃場にクワ、クワの伐採集積場があり、すぐその近にヨモギもあります。

2. ハスジカツオゾウムシ

体形は円筒状に近く、色は濃紺色でなんとなく魚の鱗に見えます。上翅には斜めの白っぽい筋状の模様(斜筋「ハスジ」)があります。これがハスジカツオの名前の由来だと思っています。体長は約10mmから14mm程度でゾウムシの中では大きいほうです。私の標本箱には「1964年5月7日三重県津市旭町」のラベルを付けたこのゾウムシの標本があります。一番古い標本が1963年(中学1年生)なのでそれに次いで古い標本です。中学校の帰り道に採集したかすかな記憶があります。

東山キャンパスではこれによく似たイタドリに付くカツオゾウムシがいます。ハスジカツオゾウムシより少し細長く、色は

良く似ていますが模様はありません。しかし採集したときは鉄サビのような赤い粉をつけています。標本にするとなぜか赤い粉は取れてしまい、鱗のような色となります。

3. サビヒョウタンゾウムシ

体長は7mm程度で、短吻類といわれ物が短いのでゾウムシらしくは見えません。色は濃い黄土色で模様はなく、名前についているサビは錆のことだと思いますが、私の標本箱の中で、すこし赤っぽく錆のように見えるのはわずかです。その他は泥が付着しているようで、なかなか錆には見えません。体形もあまりヒョウタン瓢箪の形状には見えず特徴を言い表しにくいゾウムシです。図鑑には〇〇ヒョウタンゾウムシというのが十数種掲載されていますが、もう少し瓢箪らしい形状をしているゾウムシは今年の1・2月号で紹介したアラムネヒ



写真4 サビヒョウタンゾウムシ

サゴ(瓢)クチカクシゾウムシでしょう。

サビヒョウタンゾウムシはサイの農業害虫として嫌われており、ネット検索でも害虫としての紹介がいくつかヒットします。このゾウムシがヨモギにつくことは紹介されていませんが、様々なヤサイの害虫といわれているので、ヨモギにもつくでしょう。東山キャンパスではヨモギ以外から採集した経験はありません。

◆今後のレース予定(今年度決定分)

10月11日: 駅伝強化長距離競技会(知多運動公園陸上競技場)5000m

10月18日: 名古屋支部選手権(瑞穂北陸上競技場)5000m

10月19日: 名古屋支部選手権(瑞穂北陸上競技場)1500m

11月23日: 名古屋ハーフマラソン(瑞穂陸上競技場発着、名古屋シティマラソンと同時開催)

2月15日: 泉州国際市民マラソン(堺市)マラソン

市民スポーツ祭典に参加して

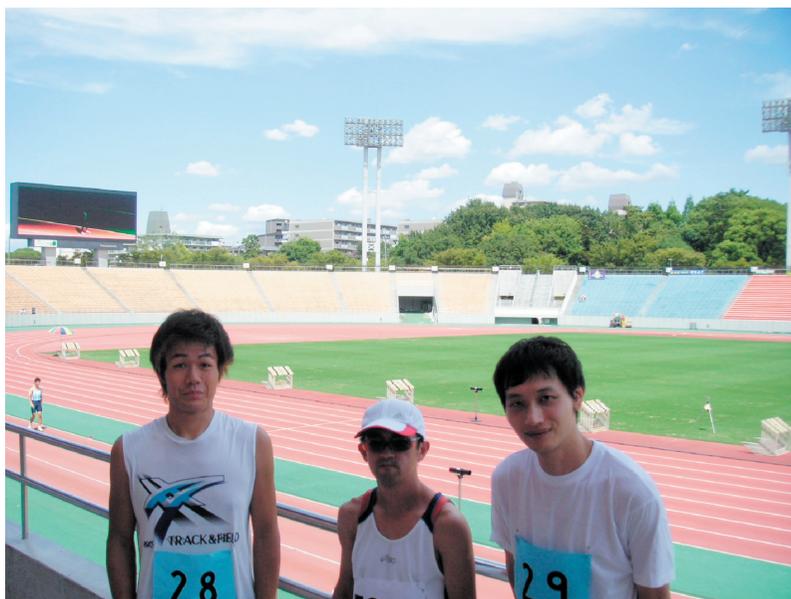
最初にこの話を聞いた時は正直言って「何もこの暑い最中に走るなんて!・・・」とんでもない話だと思いました。しかし、市民ランナーにとって秋から始まる本格的シーズンに向けて暑い夏の走り込みも大事なことかと思い、参加することとした。僅か2,000mのことだし、50歳以上という年齢別でもあり自分自身の目標タイムを持って走ることだし、瑞穂陸上競技場のトラックを走れるチャンスでもある。

日頃走っている東山キャンパスの周りを走るのとも違うし・・・色々な思いを背負って走る決心を固めた次第である。

案の定当日は酷暑であった。気温も34°Cを超え、グラウンドではもっと高くなっていると思われる。受付を終えスタート時刻を待つ、流石真夏のRUNで参加者も少ない。好きな者しか居ない感じだ。したがって走る気が満々の

者ばかりである。自分のペースで走るのが大事な気がした。自分の申告タイムを目標に走り切るのが大事だね・・・そう思いつつ軽めのジョグをしながら待つ。午後1時半過ぎに招集が掛かりスタートラインに整列。緊張の一瞬である。号砲が鳴り一斉にスタートする。速すぎるランナーにビックリ仰天だ! 1周400mだから僅か5周の所為でみんな激走だ。1周毎に時計を見て走った。こうなれば目標タイムを目指そう・・・勿論完走であるが、順位は2の次で問題は申告タイムだ。結局目標8分30秒に対し、8分14秒で走ることが出来満足した結果であった。如何に自分のペースで走ることが大切かを実感した”酷暑のRUN(乱)”であった。今シーズンも自分のペースで市民ランナーとして色んな大会を目指して走ろう! 健康で体が動けるありがたさを肌で感じながら。走り終わった後で飲んだ水の美味しかったこと感謝です!

(横井益男)



ランニングノート (1)

名古屋市市民スポーツ祭

8月17日 会場：瑞穂陸上競技場

天候：13:00 晴れ 気温：34℃

湿度：41% 北西の風 3 m

12:45~ 召集 13:15~ 競技開始

Result(教職員関係分のみ)

伊藤 耕：6' 50" 85、14 位 / 18 位

横井益男：8' 14" 99、27 位 / 36 位

8月17日に名古屋祭りではない名古屋市民のお祭りに参加してきました。出場は、横井、伊藤(職員)、学生2名、研究員1名計5名、走り幅跳びに出場した学生以外は全員2000mに出場しました。

しかしこのお祭りの3日前まで蓼科に合宿に行っていて、疲労の抜けきらない状態でのスタートとなりました。2000mのレースというのは長距離走のようですが、そのスタートとは短距離走じゃないの？ というくらいのスピードです。(先頭は初めの400mが70秒、つまり100m17秒)。この先頭集団につこうかとも思ったものの、以前1500mの試合に出た時、入りの400mを73秒で行って失速した経験を踏まえて、入りの400mはやや抑えて79秒で通過しました。とはいえ全力で400m走って70秒きるのがやっとのぼくです。79秒というのは今の走力と、当日の30度を越える気温を考えるとそのまま2000m押し切れません。実際その後のラップは(79" → 81" → 84" → 83" → 83") 少しずつ低下しています。もう2週目の800m前後からは乳酸との戦いで、頭の60%は「苦しい」、5%は「終わった後何食べようか」、残りは「空白」で構成され始めます。一番苦しいのは3週目で、この3週目の1200mを乗り越えたらもうあとは2週です。頭のスイッチを少しだけ切り替えて800m先の天国目指してもう一踏ん張りです。この「頭のスイッチを少しだけ切り替える」というのが言うのは簡単なの

ですが、なかなか難しく、今のレベルでは「ん？ 少しペース上げた？」程度にしかペースアップできません。これがオリンピックで5000m、10000mで優勝したベケレクラスになると62" → 53" なんて同じ人間とは思えない切り替えになります。この「頭のスイッチを少しだけ切り替える」というのをもう少し言葉を変えて言うと、2000mなら「1600mと400m」、5000mなら「4600mと400m」というように、全く違う種目と考え、動きそのものも切り替えていかなければいけません。

こういう苦しいときに、声援があるとほんのちょっとだけ元気がやる気が回復します。これが若い女の子の声援だったりするとさらにもう少しやる気が回復します。ということで、これを読んで陸上の試合を見たいと思った方がいらっしゃいましたら一度瑞穂に応援に来てください。

しかしながら、足りない能力が声援によって急に発揮されることはないので、普段の練習を工夫して能力の向上を図るしかありません。最近の取り組みとしては、前述の「切り替え」を試合でできるようにするために、たとえば6000mを23~24分で走った後すぐに(300m全力+100mjog) × 2~3のように、練習の最後に300m程度の全力走を取り入れたりしています。一緒に苦しみに立ち向かう練習仲間も興味のある方はご連絡ください。

(伊藤 耕)

ニユリスに一喝!!

ガソリン価格の高騰

この夏前から、石油の価格がどんどん高くなり、一時、1バレル200ドルになるかと言われた。2ヶ月前、147ドルまでいったところが、一転下がりはじめ、100ドル近くになった。それでも、年初に比べれば倍以上の高止まり。今度はこれ以上安くなると、不況になるかという。本当のところは分からないが、どちらにしても厄介千万。

昭和47、48年(1972-3)の第一次のオイルショックでは、たかだか1バレル1ドル以下だった原油が数ドルになっただけ、それでも、ガソリンは、50円以下だったのが、今回と同じくらしい水準になった。その上、当時は売り惜しみもあった。このショックがあまりにも鮮烈で、第2次のことは余りはつきり覚えていない。

今回は、ガソリンが1リットル180円

以上になった。少し落ちついても、160円以上。それでも安くなつたと思うのは、何かマジックに掛かったみたいだ。

この原油高は、諸方面に随分深刻な影響をもたらしている。漁業関係者や運輸関係の人々にとってはほとんど無い災難だ。原油高を題材にしたテレビ番組があった。交通機関が不便なところでは、一家一台ではなく、一人一台というくらいに車が普及しており、まさに、そういう

二重価格―非食用米の転売

輸入した米、と言うより、輸入させられた米に基準を超えた農薬が残っていたり、カビが生えてそのカビから猛毒が検出されたりした米、これを「事故米」というのだそうだ。何故、そんな物を輸入するのか。輸入する

所では人々の活動の足であり、影響は大変である。

そのことは確かにその通りであるが、隣近所、と言ってもかなり遠くなるのだが、に行くにも車、一寸の買物も車、これでは溜まったものでないし、体にも良くない。これを機に少し自分の体を動かして健康体を得れば、まさに、奇貨おくべしである。

ガソリン高に関係ないが、そのテレビを見ていて驚いたことを一つだけ。節約しなければならぬと言いつつ、その中で、歯磨きするとき、水道の出しばなしだけは止めてね、と言う奥さんに言われた旦那はにやにや笑うだけ。これでは仕方ないなあと思えるほか無かった。一事が万事だろうと。

(田 2008年9月13日記)

のは、WTOの取り決めて仕方がないのかも知れないが、そんな農薬混じりの米は買わなくてもいいのではないか、返せばいいのではないか。カビは一体どこで発生したかが問題である。昔、「黄変米」なるものがあって、時

の厚生大臣が毒ではないと言ってみんなの前で試食していたのを思い出した。その時は、米が足りなかつたので仕方なかつたのである。

その、「事故米」を廃棄するのは勿体ない(確かにそうだ)と言うので、工業用の糊の原料に安く業者に売った。その値段は、1kg3円から12円という(ほとんどただ同然)。それを買った業者が、食用として転売したのが、騒動の始まりである(転売価格は、20倍から数十倍に達する)。見たところでは何も区別が付かない。其れを国産米と言ったり、アメリカ産と言ったりして、今はやりの食品の産地偽装。その影響は今次から次へと拡がっている。小学校や病院、老人介護施設の給食、菓子の原料、酒・焼酎さらに薬品の原料と随分広範囲にわたる。

農水省は、この事故米を売り渡したところについて、過去6年間にわたり、その発覚した販売先三笠フーズには96回も立ち入り調査をしていたという。それでもそのインチキを見抜けなかつたという。何という節穴。わざと見逃したという人もいる。そうなのかも知れないが、証拠のないことを言うわけにはいか

ない。とにかく、農水省は、この事故米の処分に関り、引き取ってくれるところにそう厳しいことも言えずにいたようだ。

廃棄するのは勿体ないからと言って工業用に回すのはいいだろが、そんなに需要があるのだろうか。今後は返送すると言っているが、初めからそうすべきだったろう。

一物二価ということは、不正の温床。厳密には今回のことはそういうえないかも知れないが、見たところでは区別が付かないから、同じ物の二重価格である。何であつても、こういう事は起こる。

話は飛ぶが、例えば、消費税、ある政党は食料品は免税にするとか、税率を低くするとか言っている。こんなことをすれば必ず不正が起こる。その不正を防止するための予算は入ってくる。税金を超えるかも知れない。今の世の中、虎視眈々と不当利得を得ようとしている人がいる。その不正が起こらないようにすることが肝要だろう。

さらに話が飛ぶが、一時、上水道でもなく、下水道でもない中水道というのをつくって、飲み水ほどのきれいな水を求めないところ、例えば、トイレの洗浄

水に使おうということが言われたことがあつた。実現しなくて良かった。こんな物を作れば、作爲的でなくとも必ず事故が起こつただろう。さらには作爲的

国民がやかましい

に安い中水道を上水道と偽る事だつて有つたかも知れない。作られなくて良かった。上水道を節約すればいいのだ。
(田 2008年9月13日記)

福田改造内閣で農水省の大臣になつた大田さん、農産品の輸入に關していつたのだと思うが、「何しろ、我が国の消費者は喧しいので」とのたもうた。あれだけ首相自身が国民の目線に立つて：と言っているにもかかわらず（話は違つたが、この「目線」なる言葉、分かるけれども、何となく違和感を覚える）。BSFの問題、残留農薬の問題、今年初めに起こり、未解決の毒入り餃子の事件、はたまた、賞味期限切れのものラベルの張り替え、生産地のゴマカシ、中身と表示の不一致等々挙げだせばきりのない食品関係の問題山積の農水省の大臣、このところずーっと農水省の大臣には色々な問題があつた。又その続きなのか。

何でも黙つてはいはいと言ふことを聞いてくれればそんな楽なことには無からう。又、そのように何も文句も言わずにいられるような施策を講じてくれるなら、国民にとつてもこんないいことは無からう。しかし、そんなことはあり得まい。とすれば、国民が、正すべき事柄を一々言挙げしてくれらるることこそが政府にとつても、やりにくいと思ふかも知れないが、自分たちの気がつかないことを教えてくれるので感謝しこそすれ、「喧しい」などと言ふべきではない（九州の方言では、「やかましい」は「そのことについて詳しい」ということで、悪い意味ではないとかばう人もいる）。

ところが少ない。その点、油断は出来ないが、日本では一応言論の自由は保障されている。ひよつとすれば、されすぎているとさえ思える。子供の有害サイトへのインターネット接続を制限するのですら、表現の自由を侵すなどという御仁もいる。どこかの国のように、政府批判に通じるような言論が見られるサイトは全部閉鎖して国民の目から遠ざけたり、外国からの電波は全部妨害したり、衛星経由で話の出来る電話など持つことすら禁止の所がある。テレビの実況放送が一分遅れだつたということを知ったときには唖然とした。そんなにまで国民が怖いのか。あまりの自由が必要かどうかはともかくとしても、自由がいい。ただ、他人の自由を侵すようなことは談じていけない。慎みのある自由こそが人々の自由を保障するのである。
(田 2008年8月19日記)

後日談になるが、かの大臣、被食用米に関する諸々の不始末の責任を取ると言つて辞任した。農水省の責任ではなく扱つた業者の責任だと言つた事務方トップも辞めた。この辞め方は別の問題があるが、又の機会にしよう。
(田 2008年9月19日記)

戦争について学ぶ本

団塊世代は「戦争を知らない子供たち」（「戦争が終わって僕らは生まれた」というフォーカグループ・ジローズの歌の題名）です。そもそも団塊の世代は、敗戦とともに戦地から男達が帰ってきたことにより生じたベビーブームの結果です。戦争中にも「産めよ増やせよ」という標語があったのですが、男がいなくては子どもは産まれませんでした。

戦後生まれとはいえ、田舎町にもやってきたジープのGI（米軍兵士）から当時としてはたいへん珍しいチョコレートやガムをもらったり、神社の縁日には物乞いをする白衣の傷痍軍人の姿を見えています。幼かったせいか、特別ひもじ



『十五年戦争小史 = 新版』(江口圭一著、1991 青木書店)

物から選び採り自分で学習する以外にはありませんでした。そう気がついたのは20歳の頃です。それ以来いろいろの本に触れてきました。『十五年戦争小史』新版（江口圭一著）は、長く愛知大学で講義を

い体験は覚えていませんが、学校給食では、ユニセフを通じて支給された（後に知ったことです）脱脂粉乳を毎日飲みました。

しかし戦争の話や教師から聞く機会は少なく、もっぱら映画や子ども向けの雑誌で戦争に触れました。が、これらの中には、戦死者や戦争指導者を英雄視する話が多くありました（今だからこう言えます）。

担当していた著者が書いた教科書です。1931年9月の柳条湖事件から1945年8月の終戦まで、時間の経過とともに、どんな背景の下でどんな事件が起きたか、たぐさんの出来事が簡潔に表現してあります。物語とは違って読みやすさはありませんが、この本を骨格とし、たとえば平頂山事件（1932年9月、中国東北地方の「満州」撫順市の南にある平頂山集落で起きた住民大量虐殺事件）が出てきたら、その事件を扱った詳しい本、たとえば『平頂山事件とは何だったのか―裁判が紡いだ日本と中国の市民のきずな』（平頂山事件訴訟弁護団編纂）を読む、レイテ戦が出てきたら、たとえば『レイテ戦記』（大岡昇平著）を読むというように肉付けをし、さらにイメージが浮かんできます。



『太平洋戦争 = 第二版』(家永三郎著、1986 岩波書店)



『戦争責任』(家永三郎著、1985 岩波書店)

『太平洋戦争』第二版（家永三郎著）も前掲書と同期間を対象にしています。こちらはより項目をしぼり、中国を含め連合国側の情勢や日本国内の経済・文化情勢などをていねいに書き込んでいます。

同じ著者による『戦争責任』は、十五年戦争における各国の責任を論じています。当然ながら原爆を投下したアメリカの責任にも、また昭和天皇の責任にも言及しています。この本で著者は、「今日なぜ戦争責任を論ずるのか」という理由の一つに「責任のけじめが明確につけられることなく今日にいたっている」ことが、戦後の歴史に好ましくないさまざまな現象を生み出す重要な原因となったことをあげています。また、「責任を生ずる原因としての『戦争の惨